



日本現代文學全集・講談社版 96

圓地文子集 幸田文

編	集	
伊	藤	整
龜	井	勝
中	村	光
平	野	夫
山	本	謙
	健	吉

日本現代文學全集

96

圓地文子・幸田文集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



昭和41年9月10日 印刷
昭和41年9月19日 發行

定 價 600圓

© KÔDANSHA 1966

著 者 幸 田 文 子
圓 地 文 子
えん ち ふ こ
こう だ み ー
幸 田 文 子

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽町3-19
電話東京 (942) 1111 (大代表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷	大 日 本 印 刷 株 式 會 社
寫 真	株 式 會 社 興 陽 社
版 印	大 製 株 式 會 社
製 本	株 式 會 社 岡 山 紙 器 所
製 函	株 式 會 社 第 一 紙 藝 社
背 皮	小 林 榮 商 事 株 式 會 社
表 紙	日 本 ク ロ ス 工 業 株 式 會 社
ク ロ ス	日 本 加 工 製 紙 株 式 會 社
口 繪 用 紙	本 州 製 紙 株 式 會 社
本 文 用 紙	安 倍 川 工 業 株 式 會 社
函 貼 用 紙	三 菱 製 紙 株 式 會 社
見 返 し 用 紙	神 崎 製 紙 株 式 會 社
扉 用 紙	

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

圓地文子集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

女 坂……………五

ひもじい月日……………七

妖……………九

二世の縁 拾遺……………一〇

東京の土……………一九

驢馬の耳……………三

化 性……………一四

小町變相……………一五

作品解説……………瀬沼茂樹 四三

圓地文子入門……………和田芳惠 四六

年 譜……………四四

參考文獻……………四四

幸田文集目次

卷頭寫眞

筆蹟

父……………三九

あとみよそわか……………二六五

勳章……………二六六

黒い裾……………二九一

流れる……………三〇二

雛……………四〇〇

笛……………四〇六

造語家……………四二七

啐啄……………四二八

作品解説……………瀬沼茂樹三四

幸田文入門……………和田芳恵三〇

年譜……………四四一

参考文献……………四四六

圓地文子集

書くといふこと

それ自体私には

生命の燃焼を

意味する

二又子

女 坂

第一章

初 花

初夏の午後であつた。

浅草花川戸の隅田川を背にした久須美の家では母親のきんが朝からかかつて念入りに掃除した二階の二間つぎの部屋の床に庭の白い鐵仙の薔花を入れて、やれやれこれですんだというように片手に腰をたたきながらくらい梯子段を降りて來た。

玄關の隣の三疊の連子窓の下で川から來る明るい水明りに針の目をすかせて、仕立ものの縫糸をとおしていた娘のとしては、花疊紙を持つて部屋へ入つて來た母親に聲をかけた。

「今、お隣のボンボン（時計）が三時を打つてよ……お客さん、晚いねえ、おつ母さん」

「おや、もうそうなるかい。……どうで宇都宮から乗りつぎの人力車だというから、晝すぎといつても、夕方にはなろうよ……」

きんは茶の間の長火鉢の前に坐つて長目の繼羅字の煙管に火をつけた。

「朝から精出したから、くたびれたでしよ。おつ母さん」

としてはつと笑つて少しほつれた銀杏返しに髷にほそい縫針をすいすいとおしてから、絢臺の赤い針坊主にさした。それから膝の上の濱縮緬らしい仕立物をそつと疊紙の上に移して、悪い足をひいて母親のそばへ出た。自分も一休みと思つたのである。

「毎日掃除をしていてもよく塵埃がたまるもんだねえ」

きんはたすきをとつた袖口をびんとのはして黒縹子の衿のほこりを擦癖らしく手ではたきながらいう。踏臺にのつて欄間から鴨居の長押の溝までさつぱり塵埃を拭きとつたのが、娘には言われないが自慢なのである。

「白川さんの奥さんは、何だつて、東京へ出てみえるんだらうね」

としては掃除には母親ほど興味がないらしく、針仕事につかれた眼のまわりを指先きで揉みながら言うのだった。

「何つたつて、お前……」

きんは不審そうに眉をよせて娘をみた。氣の若い母親と病身で婚期を過してしまつた娘は今では親子というより姉妹のようなつながり合いでものごとを話しあうのだった。時々としの方がきんより年寄じみた考え方をした。

「東京見物だつて手紙に書いてあつたじやないか……」

「そうかしら」

としては仔細らしく首を傾けて言つた。

「あの御新造……暢氣に東京見物なんぞに出て見えるかしら……白川さんは、大書記官とかつて、縣廳じや縣令さんのすぐ下なんですよ」

「そうだよ。大した羽振だつて話だ」

きんはとんとん火鉢の縁で煙管をはたきながら言つた。

「出世したもんだよね。前に東京府のお勤めで隣にいた時分にやあんなになる人とは思わなかつた……もつとも、その時分から、きれ人じやあつたけれどね」

「だからさ、おつ母さん」

と、としは母親の肩をたたくような聲で言うのだつた。

「その忙しい旦那を残して、お嬢さんと女中をつれて一、二カ月がかりの東京見物なんて、何だかあんまり悠長でおかしいわ。お里があるわけじやなし……」

「そうだよ……あの御新造も、白川さんと同じ熊本ものだもの……
けど、お前……」

と、きんは、想像がつかないらしく、娘の顔をまじまじみて、

「まさか離縁ばなしでもあるまい……白川さんからの手紙にそんな模様はちつともないもの……」

「そりやそうでしょうよ」

としは言いながら、占いででもするような眼で火鉢の猫板に頬杖をついている。きんはこれまでもこの足の悪い娘の豫感することがあつた。市子の口寄せでもみるような眼でしばらくとしの顔を見ていると、としは頬杖をはずして、

「わからないわ」
と首をふつた。

白川倫が九つになる娘の悦子と女中のよしをつれて、久須美の家の前に伸から降りたつたのはそれから一時間ばかりたつた後であつた。

取りあえず沸かしてあつた風呂に入つて、旅の塵埃を洗い落した後、倫は福島の名産だという干柿や會津塗などの外にきんにもとしにもそれぞれ似つかわしい反物を土産に持たせて、階下の茶の間へ來た。

縞ものに黒縮緬の五つ紋の羽織をどつしり着て、衣紋つきのいい撫肩の胸を少しそらせるようにして坐っている倫の様子には四、五年見ない中に、めつきり官員の奥さんらしい容態が具つていた。照

りのいい黄味がかった顔色の額が稍とひろく、厚肉の形のよい鼻を中心に眼も口もゆつくり間隔をとつて置かれているので、神經質な印象はどこにもなかつたが、はれた眼瞼の下におかれたように細く見ひらかれている眼には、ちようどその眼瞼を蔽ひにしているような表情の流出を、食いとめているような一種のもどかしさがあつた。白川夫婦が東京に居たころ二年近く隣家に住まつて懇意になつていながら、きんなどが倫に氣の置けるところのあるのもその重たい眼ざしと崩したところのない言葉つきや動作のせいなのであつた。それは、勿體ぶつているとか、意地の悪いとかいうのとは違つているので、批難しかねるのだつたが、江戸つ子のきんに簡単にいわせれば、氣のさげない人とでもいうのだろうか。しかし若い時よりも良人の地位が重々しくなつた今では、倫のそういう堅くるしさもなかなか貫目があつて立派に見えるときんは思つた。

悦子はまだのび揃わない髪をお煙草盆にゆつて、眼なれない川の眺めが珍しらしく連子窓の方へばかり眼をやつていた。

「大そう綺麗におなりになりましたねえ」

ときんがお世辭でなしに言つたほど悦子は色が白く中高の美しい顔立ちだつた。

「お父さまによく似ていらつしやる」

としも言つた。ほんとうに悦子の頬の肉のうすい品のよい顔や首の長い身體つきは倫よりも白川に似ていた。倫は悦子にはこわい母親であるらしく、

「悦」

と倫が一聲低くよぶと、悦子はすぐんだように母の傍へ來て坐つた。

「よく思いたつて出ていらつしやいましたこと。旦那さまも縣令さん同様の御威勢だといえますから……奥さまのお心づかいも大變でござんしょう」

ときんはせかせか煎茶をいれてすすめながら言つた。

「いいえ、もう私もお役向きのことは一向わかりませんので……」

と倫は口髭なについて、白川さんは縣ではお大名暮らしだそうだとときさんが人の噂なきにきいている羽振のよい自慢話などは、穂も見せなかつた。

盛り場の開けた話だの、髪形の少し見ない中にちがつたことだの、新富座の芝居はどんな狂言を出しているかだの、東京を中心の世間話にしばらく花が咲いた後で倫は、

「私も、今度はゆつくり遊んで来いとするしが出ましてね……まあ、その中には少し用もまじつていますのですけれど……」

といつて、傍にいた悦子の髪赤い櫛をちよつとさし直した。何げない言葉つきだつたのできんは少しも氣にならなかつたが、としはやつぱり何か倫が大切な用事をもっていることを感じた。しつとりと落ちついてふるまっている倫の身體に何か常でない鈍が沈んでいるように見えた。

その翌日出不精なとしが、昨日の土産の禮心に悦子を觀音さまの御詣りに誘うと、よしも悦子も喜んでつれ立つて出かけた。

「歸りに仲見世で繪草紙でも買つてお上げよ」

ときさんは娘にいつけて門まで送つたが、その足で二階へ上つてゆくと倫が次の間に坐つて持つて来た葛籠から衣類を出し入れていた。白い雲のちらばつてゐる空が川水に映つて、倫の坐つてゐる二間つづきの座敷も白つぱい明るさにひろびろしていた。

「まあ、早速に、御精が出ますこと」

と言いながらきんが縁側に膝をつくと、倫はゆつくりした動作で着物一枚一枚葛籠に収めながら、

「悦が大きくなつたので、あれを持つてゆくこれも持つてゆくなど申して……旅をするにもめんどになりました。……あの御隠居さん……いま御用はおありでしょうか」

と言つた。恰度膝を立てて葛籠の中へ悦子の黄八丈の袴を沈めるようにおいてゐる時なので倫の顔は見えなかつた。きんはもとより世間話をしようと上つて来たのであつたが、倫にそう言われると何だか上つて来たのがきまりの悪いような氣分になつた。

「いいえ……奥さま、何か御用でございいますか」

「いえ、お忙しければ、今にも限らないのですけれど、悦が出かけておりますし……まあ、ちよつと、こちらへおいで下さいまし」

倫はやつぱりゆつたりした調子で言つて、座敷の縁に近いところへ座布團をもつて来た。

「あの……實は今度の滞在中に、是非あなたに御骨折願ひ度いことがございいますのです」

「おや、何でもござんしよう。私のようなものでお間にあひますことなら、何でもいたしますけれど……」

きんは勢よく言つてみたけれど、倫の行儀よく膝に手を置いて伏眼になつてゐる顔から何を語り出されるのか想像は出来なかつた。倫のゆつくりした長めの頬のはずれから口尻にかけて、うつすら微笑んでゐるらしい微かな線が浮んでゐた。

「妙なお話しなのですよ」

と倫はちよつと鬢のあたりへ手を上げながら言つた。身だしなみのいい倫の髪はいつもきれいに取上げられてゐるのだつたが倫は一筋のみだれ毛をも見苦しがつて時々髪を撫でて見る癖があつた。

何か女についてのことらしいときんはその時氣づいた。白川は東京にゐるころにも女出入が多く倫が心配したことをしつてゐるので、いまのような地位になり登れば猶更そういう事柄はあるに違ひなかつた。でもそういう内情を推察したように立入るのは、都會人のエチケットに反してゐるのできんはやつぱりおぼおしい表情をつくつてゐた。

「何ですか、どうぞ、御遠慮なしにおつしやつて下さいましよ」

「ええ、どうせお頼みしなければならぬことですから……」
 倫の口もとにはやつぱり女面のようなほのかな笑いが漂っていた。

「あの實は、小間使を一人抱えて歸り度いのでございます。年は十五から十七、八ぐらい……出来れば堅い家の娘で……縹緖のいい子でないといひます」

終りの言葉と言つた時口もとの微笑がはつきりして、厚い眼瞼の下、その笑いと凡そふさわしくない生真面目な光を滲えた。

「ああ、なるほど……」

そういつた自分の聲がいかにも輕薄に聞えて、きんは下を向いた。それだけきけば先日としの豫感したことははつきりのみこめるのだつた。

うなずくとも溜息ともつかず息を深く吸つてからきんは言つた。

「やつぱり、もうああいふ御身分におなりなさると……そういうものが要りますんでしようねえ」

「どうも……やつぱりねえ、端が承知いたしませんのでねえ」

それは嘘だつた。倫は胸の中に噴上げて來る感情を力一杯おさえつておさえつけていた。

夫が妾を新しくかかえようとしているのはもう一年ほど前からの計畫だつた。白川にとり入つてゐる下役達には倫が酒の席などにいるとよく、

「奥さん、このくらいのお邸に、お腰元が不足していますな」とか、

「大書記官も多忙すぎますよ。ちつと變つた枕で樂寢をさせてお上げなさい」

とか立入つた口をきいた。部下に甘くみられる事の大嫌いな白川が、妻にそういうことを言う時だけ、それらの無遠慮な男達をたしなめもしないのを見ると、倫には夫が彼らの口をかりて自分に相談をかけているのだと思えた。

女にかけては放埒な白川を倫はもうこの年までによく知つてい、結婚して數年のような純な愛情は夫に持てなかつたが、それでも敏腕で男ぶりのよい白川は倫には充分魅力のある良人であつた。

細川藩の下級の武士の家に産れて維新前の混亂した秩序の間で教育も藝ことも碌々身につけず早く結婚してしまつた倫には今の良人の位置にふさわしく交際や家政をとりさばいてゆくのはなかなかの仕事だつた。でも氣象の烈しい倫は夫と家とを大切に思う道徳できびしく自分を縛つて、誰れからも非をうたれないように油斷なく家事に心をつかつて暮らしていた。倫とすれば一ぱいの愛情と智慧が夫を中心とした白川家の生活につこまれていたのである。

それだけに倫は年よりもふけていた。美人ではないが十人並みの縹緖で、身だしなみもよい方だつたから、特に年寄じみているわけではなかつたが、性來の堅い氣性なのが責任をいつも重く擔つていたので、年増盛りの女に見られる熱れた肉感など薬にしたくもなく、白川からみれば十以上も若い筈の妻が時に姉のように見えて驚かされることがあつた。もつとも倫のそうした厚い表皮の下には熱い血が油火のように強く燃えていることも白川は誰れよりも知つていた。白川はそういう倫のおさえた情熱にほてりを感じる時があつた。それは明らかに自分達が産れ育つた中九州の照りつける容赦のない夏の陽を連想させた。まだ山形に勤めているころ、夏の夜どうしたことが夫婦の寝ている蚊帳の中に小さい蛇が入つていたことがあつた。ふとめざめて白川は浴衣の胸のあたりに、冷りと水のような感じをうけた。おかしいと思つて手をやるとその冷たさがすると滑り出した。

白川が聲を立てて飛び起きると、倫もおどろいて身を起した。枕もとの行燈を引きよせて火皿を向けると、夫の肩に黒い紐のようなものがぬらりと光つて垂れていた……

「蛇！」

と白川が叫んだのと、倫の手がのびて夢中にその生きている紐を

擱んだのと一緒だった。

倫は白川ともつれるように縁へ出て開けてあつた雨戸から庭にそれを投げた。倫の身体はふるえていたが、寝間着の袴のはだけた胸にもあらわにした手にも、いつもの倫が封じて見せまいとしている生々しさが逞しく匂つていた。強氣な白川は、

「何故捨てる……殺してやるのに……」

と倫を叱つたが、倫の情熱を感じながら、白川にはもうそのころから倫が愛情の対象にはなりにくくなつていた。自分の強氣の一枚上をゆく強さが倫にあるのが、けぶたくなじめないのだった。

「妾というといやに表立つが、お前にも小間使だ……よく仕込んでお前が交際で外へ出るような時にも安心して委せて置ける氣質のいい若い女がうちにいるのもいいじゃないか。だからおれは藝者などうちへ入れて風儀をわるくしたくない。お前を信用してお前に一切委せるから、若い……出来るならおぼこな娘がいい、そういうのをお前の眼鏡で探して来てくれ。費用はこの中から使つてくれ」

そう言つて白川は、倫のおどろいた程大枚の金を目の前に置いた。

いままで他人の口から言われていた時はきかぬ振で通していた倫も、白川からそう口をきられるともうどうすることも出来なかつた。自分がこの役目を断れば夫は恐らく勝手に自分で選んだ女をうちへ引入れるであろう。「お前の選擇に委せる」という言葉の中には白川が家の爲に倫の立場を重くみている信頼が含まれているのである。その奇妙な信頼を重く胸にしまつて、倫は東京見物を楽しんでいる悦子やよしをつれ、人力車にゆられ通して久須美の家まで運ばれて來たのだつた。

「ようございます。私の懇意な女の小間物屋にそういう口入れをよくする人がござんすから、早速、頼んで見ましょう」

きんは倫の心の奥の重さによい工合にふれて來ず事務的に話を運

んで行つた。藏前の札差の分れだという家に産れて、舊幕時代の大きな町人や武家の氣風をしつてゐるきんには、男は出世すれば妾の一人や二人持つのは不思議でもなんでもなかつた。かえつて家の盛つて行くあらわれのようで奥さんも嫉妬半分、少しは得意も交つてゐるだらうぐらゐにきんは想像していた。

それゆゑ夜になつて、娘と二人床へ入つてから、まだ氣を置くように聲をひそめて、ちらちら二階へ眼を走らせながら、そのことをとくに話した時も、

「氣の毒だねえ」

と言う娘の沈んだ聲にむしろびつくりしたくらいだった。

「あの御新造……お母さんはしばらく見ない中に貫目がついて立派になつたというけど、私には苦勞の貫目みたいに見えるわ。うちの格子があいて、入つて來た顔をみた時、私、ああと思つたもの……」

「福のある人には、それだけの苦勞もついてまわるものさ……」

ときんはこともなげに言つた。

「まあ、何しろ、性のしれた、氣質のいい娘を世話して上げたいものだ。旦那は生娘がなければ、半玉でもいい、すれていない女ならいいつて言いなさつたそうだけれど……」

どの部屋もひんやり靜まつて大寺の庫裏のような縣廳の官舎から出て來てみると、隅田川のひろい水の眺めが眼の前にあつて、船の櫓を押しきる音や川波のゆれるそよぎが一日中耳についているこの家の二階はひどく陽氣で幼い悦子の氣に入つた。よしが用をしている間悦子は裏木戸から棧橋へ出て足もとの代をゆすつてゐる水のゆるやかな動きを眺めたり、忙しそうに漕ぎすぎてゆく荷船の船頭の威勢のよいかけ聲に耳をとられたりしてゐる。そんな時、連子格子の間からとしの青白い顔がのぞいて、

「お嬢ちゃん、氣をつけてよ、落ちちやいやですよ」

と聲をかける。今日もきんは倫と一緒に出かけているのである。

「大丈夫よ」

と悦子は、ふり向いてにつと笑う。年より大人びてみえる細面の整った顔に、紅の切れをかけた小さい髻が可愛かつた。

「お嬢ちゃん、いいものを上げるからいらつしやい」

「ええ」

と素直に言つて、悦子は紅い縞のたもとをゆらゆらさせて、窓の下へ来た。連子の下の狭い土を軟かくならして、きんの丹精している朝顔が五、六本細い竹にからみついて蔓をのびしていた。外からみると窓の中のとしの顔もひろげている縫物も悦子にはうちでみるのと別のように見えた。としは連子の間から瘦せた手を出して、指先きにつまんでいる紅絹の小さいくくり猿を悦子の眼の前でふらふつてみせた。

「綺麗ねえ」

と悦子は連子に兩手でつかまつて、うれしそうに糸の先の小さい猿をみている。その顔があとけなくほころびているのどしは、この子はお母さんがいないでも淋しがりやなと思ひ、ひとりでうなずくのだった。

「お母さま、どこへいらしたの」

くくり猿の糸をふらふらさせている悦子にとしはきいてみる。

「御用……」

と悦子ははつきり言う。

「お嬢さん、お母さまいらつしやらないと淋しいでしょう」

「ええ……」

と言つたが、眼は活々冴えていて、

「でもよしやがいるから……」

「ああ、そうね、およしさんがいますものね」

ととしはうなずいてみせた。

「お國にいらしてもお母さま御用が多いの？」

「ええ」

と又、悦子ははつきり言つた。

「お客さまがあるの……」

「大變ねえ、お父さまはお出かけが多くつて？」

「ええ、晝間はずつと縣廳よ。夜もお招^{まね}られがあたり、おうちへお客が来たり、私、お父さまと一日あわないことよくあるの……」

「そう……女中さんは今幾人おいでなの」

「三人……よしやとせきやと、きみやよ、それに馬^{うま}丁と書生……」

「まあまあ大變な御家内ね。それではお母さまもお忙しい筈ですわ」

としは針の目をとめて微笑んだ。この滞在の間に倫が探し出してつれてゆく女が頭^{かぶ}に浮び、それは悦子の境遇にも何か變化を與えるかもしれないように想像された。

としと悦子が話しあつていころ、倫ときんは柳橋の「卯月」という船宿の二階で男藝者の善好を相手に話していた。

倫を主人にして、きんはすつかりへりくだつていた。善好は旗本崩れだけにさばけた中にも賤しいところのないきりとした男で昔なじみのきんとは商賣をはなれた口のきき方だった。

「そうですね、お話をうかがうと、なかなか難かしいね。まあ、もう少しすると、四、五人、縹緞のいい子が来ますがね……」

ちよつともち扱つた形に、善好は銀の細身の煙管をくると指のさきでまわした。腹の中では、どこに國に妾を本妻にさがさせる奴があるもんか、國ものはこれだからいやだと舌うちしているのだつたが、向いあつている倫の權^{けん}高いというでもなく、愛嬌があるというでもなく、どこに變つた一筋もないなりに、嘲弄したり、しやれのめしたりする事の出来ない窮屈なところが、善好の中に残っている傳^{でん}統的な矜持にどこか合うのだつた。

「私達の眼でみていいと思つても殿方のこのみがありますものね

え、奥さま」

いける口のきんはさされた猪口を善好にかえしながら倫の方をみた。

「いや、私なんぞのこのみも餘り當てにはなりませんぜ。このごろの前髪を揃えて切つて女唐傘をさした女の學生なんぞ……どうもね」

「いやですよ、細井さん、そんな、らしやめんみたいなものを探しちゃいらつしやらないんですよ。臺地の半玉ならいまだつて細井さんのお好みの、英泉だちのいい女もありましようにき」

「それがね、私やどうも、口が悪くつて若い娘には憎まれもんなんでね」

そういつた時、中二階の梯子をとんとんと昇つて来る足音がして、

「今晚は……」

という入れまじつた聲。

姐さん株の老妓につれられた雛妓が四、五人、薬玉のようにかたまつて入つて來た。

「お待ちなすつて？」

と善好にいいながら老妓は女中から三味線をうけとつて、三下りに合せはじめた。

地方の官員の奥さんが東京みやげに美しいお酌の手踊をみたいという觸込みなので、晝座敷なのに雛妓達は牡丹のように着飾つていた。

お座つきがすむと二人ずつかわりあつて雛妓が踊りはじめた。踊つていないのは倫の傍へ来て、料理を並べかえたり酌をしたりした。倫は酒は嫌いだったが手持ちぶさたなので、盃をふくみながら、踊をみたり傍で善好やきんに話している雛妓の様子を見たりしていた。

年は皆十四、五であらうか。中に二人は梅、櫻と言いたいほど美

しかつたが、一人は踊つている時あらわになると、手が細くくろずんでいて貧相だつたし、一人はつんと高い鼻の横に笑う時による筋がいかに酷薄そうで青鷲の感じだつた。あんな娘がうちへ入つて、だんだん大きくなつていつたらと思うだけで倫はさむけ立ち、この選擇を自分に委せた良人に感謝したい氣持ちになつた。

雛妓達が歸つていつた後、倫がきんにその話をする善好がひきとつて、

「いや、奥さんはお目が高い」

と言つた。

きんはこの間から倫の相手になつて女の鑑定をしているのだつたが、倫の眼の細かくて鋭いには、感心するのを通りこしてこわいように思う時があつた。不斷のつきあひに、うるさく人の噂などしたことがなく、はりあいのないような倫が今のような場合になると女同志の目のとどかぬ隅々まで、ゆきわたつた批評をしてきんを驚かすのだつた。

この前、女小間物屋のおしげが目見えにつれて來た本所の飭屋の妹ぶんだという娘なども、眼鼻立ちが揃つていて、口のきき方もおとなしく、きんならばすぐ手をうつところだつたが、倫は首をかしげて、

「あの娘は十六だといいましたが、十八にはなつていますね、そうして……生娘ではないと思いますよ」

と言いにそうに言つた。まさかと思ひながら、精しく問いただと姉婿の職人と情事のあることがわかつた。

「奥さんはまあどうしてそんなにお目がきくんでしよう」

ときんが感嘆の目をみはると、倫は苦しそくに下を向いて、

「私だつて昔からこんなじやありませんでしたけれど……」

といつて自分を歎くような溜息をついた。白川のいろいろな情事を見てゐる中に倫の中には眞實を見破る目が具つて來てゐるらしかつた。深く人間の執着や煩惱について考えることの面倒なきも倫

と一緒に妾を探している間に娘のとしの言つた倫の「苦勞の眞目」が少しずつわかつて来るようであつた。

倫が夜机のそばに坐つて、何枚も美しい女の寫眞を眺めていると、悦子はそつと傍へよつてのぞき込んだ。

「綺麗なんどねえ。お母さま、誰なの？」

悦子が鬚の赤い布を傾けてきくと、倫はそれには答えず二、三枚の寫眞を渡して、

「悦、どの人が好き」

ときいた。

「そうねえ」

と悦子は扇形にひろげてちよつと寫眞を見たが、子供らしい一本調子で、

「これ」

と言つて、眞中のをさした。白いバックに桃割をつめて結つた十四、五の少女の堅く手を揃えた半身だつた。せまつた富士額に黒い珠を半分つんだような眼立つて大きい瞳が美しく悦子の心にうつつた。

「そう……お前も、これ」

と倫はびつくりしたように言つて、もう一度その寫眞をとつて眺めた。

「それ、誰れよう、お母さま」

と悦子がきくと倫は寫眞を重ねて、

「誰でもいいの……今にわかります」

と靜かに言つた。

その寫眞は二、三日前柳橋の櫻川善好から届けられたのだつた。

倫の選擇が難かしいので、きんの家へ來てからもう一ヵ月以上になつのに、未だに白川に通知するほどの相手は見つからないのだつ

た。倫は迎々しい字でいく度か良人に手紙を出し、お氣に入らぬ者をつれて行くようなことは萬々しないとしりわけしていた。白川からその度に急がぬでもよいから、充分に氣を遣つてくれという返事が來た。それでも、梅雨が晴れてもう盆を前にするころになると、倫の氣もせいて來た。夫ばかりでなく留守の家の取締らぬ様子が氣になつてならぬのである。

そこへ善好から新しい話が來た。

きんのきいてきたところによると、これなら白川の奥さんのお氣に入るに違いないということだつた。

石町の竹の皮屋の娘で、名を須賀という。年は十五で踊は西川、常磐津も子供の時から習つている。溫習會などへ出ると幼いころから評判される纏綴よしであつた。母親も當主の兄も評判のよい人柄なのであるが、この二、三年店の方に悪い奉公人がいて身代がまわつてしまつたので、今では店を始末するか、娘を藝者にでも出すかというところまでさしせまつている。お妾にとは親も考えていなかつたが、踊の師匠が善好と懇意な仲で白川の話をきいたので、そういうお邸なら、強いて泥水稼業に沈めるよりは、當人の出世にもなることだから話して見ようということになつた。

「あの子なら氣質もおとなしいし、第一東京のものには珍らしく肌が眞つ白でお風呂やに行つても、子供が傍へよつてみるくらいですもの……」

と西川の師匠は言つた。

ちようど二、三日中に月ざらいがあつて、その須賀という娘が、「梅の春」を踊るといので、倫ときんは善好の案内で師匠のうちへ出向いた。おさらいを見せて貰いに來た風にして、よそながら須賀を見ようというのである。石町の問屋町の間にはさまつた露地の中に師匠のうちはあつた。間口は狭かつたが二階には舞臺があつて、倫達が上つて行つた時、師匠は三味線をひいて小さい女の子が「五郎」を踊つていた。

善好をみると三味線を持つたまま師匠は眼でうなずいてちよつと笑つた。口の中がお歯黒で暗く、それが生々した眼を一層水々させていた。大體時間をはかつて來たので、須賀も來ている筈だと三人はそれとなく狭い部屋にごちやごちやくつついて見物している娘達に眼を配つた。どれも浴衣がけに、赤の入つた帯をしめていたが、端の方に坐つて、舞臺に無心に見入っている娘の際立つた美しさがすぐそれと解つた。皆が團扇を動かしている中にその娘は大して暑そうにもなくきちんとしていた。十五にしては大柄な身體つきでたしかに寫眞でみた顔立ちだつたが、奉書紙のように肌が白いのと髪が暑くしいほど多くなり色の艶をもつて白い顔をふちどつていたので、眉や眼が一きわくつきりして舞臺化粧でもしているように、派手に眼立つのだった。

驚かされた感じで倫は須賀の顔へ眼を向けていた。美しいというだけで、そこには精神の缺片がひらめき出しているような表情はなかつた。ただ濁つていない感じだけはたしかだつた。友達と話している聲が割に低く、伏し目に何か言つては靜かに眼をみはつて、相手の言うことをきいている様子が、自然でおとなしやかだつた。

五郎がすむと、師匠は三味線を地弾きにゆずつて、

「この次、お須賀さん」

と言いながら、立つて、倫達のいるところへ來た。

案の定倫の眼をつけていた娘が立上つて裾を兩手に持つたまま少しごむような格好で舞臺の方へ歩いて行つた。

「あの子でござんすよ」

と師匠は三味線が聞え出すと、すぐ、倫とさんの方へ如才なく話しかけた。

「そりやおとなしい質で、あれなら奥さまがお仕込みになるにはお樂だと思ひますよ」

あんな派手な顔立ちの癖に氣分はめいつた方で、その爲に覺えはいい癖に「踊」は一息き引立たないところがある。當人も人前で藝

を見せたりすることはあんまり好きでなく、親達の道樂で遊藝は身につけたようなものの、浮いた稼業などになつても、自分のような引込み思案ではとても駄目だろうと言つていて、こんな人氣の多い町中はほんとうは自分の性にはあわないので、青い田んぼや川のひろびろ眺められる閑靜なところに住んだら、さぞ氣持ちははればれるだろうと言つていて、須賀の踊りの手振を眺めている間に、師匠はぼつぼつ話してくれた。須賀の母親が子煩悩で師匠からちよつと白川の話を耳に入れた時も、福島へゆくのだと言つたら、そんな遠いところはと言つて急に泣き出したことだの、もしお氣に入つて使つてはいたくなくても、奥さまのお氣合一つで娘の先きが案じられるから是非一度お眼にかかつていろいろお話しなればと言つていて、きんど善好が主に相手になつていて、倫は、須賀の踊っている様子に眼をやつてゐるのだつたが、耳に入つて來る話の中で、母親の慈愛の深そうな様子など今までのどの話よりも、しつくり溶けこめるのだつた。そういう母親の娘だつたら、悪くすれてゐるところもないであらうし、福島へつれていつて自分が何かと教えてゆくにも素直ではないかと思われた。

踊を見ていても、素人の倫には細かいことはわからなかつたが、眼づかいや手足の働きに何か上からおさえられてゐるような重たさがあつて、縹緲のよい割に、はなばなしくなかつた。それもよいと倫は思つた。自分の家の中へ闖入して來る女性に對して、倫は殆ど無意識の中に、鮮明な強い性格を嫌つていた。顔形だけ派手に水水しく、心持ちの沈んだおずおずした娘……それは倫には理想に近い「陰の女」のタイプだつた。

「よさそうじゃござんせんか」

と歸り道に露地を出るとすぐ善好が言つた。倫と話す時善好は幫間らしい態度でゐることが出來なかつた。氣取つてゐるのでなく小旗本の次男坊の口調が自然に出たし、倫も善好を「細井さん」とし

て話す方が話し易かった。

「ありや藝者向きじやありませんよ。ああいう陰氣な氣分の子は賣れない」

「そうでしょうかねえ、あんなに綺麗でも……」
ときんがきいた。

「縹緲ばかりじや行きませんよ。しかし奥さん、ああいう質の女は十年もすると、いい加減芯がしつかりして來ますからね。それだけお氣をつけなさいましよ」

「そりやそうかも知れません」

倫は、白刃にひやりとふれたように身體が粟だつた。さつき須賀の踊をみている間にもその戦慄は時々倫を襲つたのだつた。

舞臺の上で顔を傾けたり、身をそらしたり、色々な艶めかしい姿態をつくつて、主に男女の情事を表現している須賀の實際には半分子供のような無邪氣な肉體を眺めていると、倫にはこの未熟な娘が、自分の邸へ連れて行かれ、あの女を馴つけることの上手な良人の手で、どんな風に手ならされ、變つてゆくか、思わず眼を閉じ息をつめた眼の前に良人と須賀のからみあつた四肢が浮び、頭へ血が上つて來て、倫は惡夢をはらいのけるように眼をみひらいた。眼の前に大きい蝶のように舞つている娘の運命については、切ない同情が浮び、同時に嫉妬が熱い急流になつて全身を駆けめぐつた。

氣に入つた女のなかつた間はそれを探す焦りて空白だつた心に突然斷食を解かれたようにひもじさが殺到して來た。良人が外の女のものになるということを、公然と見とめなければならぬ辛さが、じりじりと身を燒くのだつた。こうした苦しさを妻に與えて、平氣でいる良人は地獄の鬼のように無情に倫には思われた。良人を天として仕えることを自分の生活の信條にしている倫にとつて良人の無理に背くことは自分を同時に失うことだつたし、そういう信條以上に倫は無情な良人を愛していた。盡しても盡しても報われない愛情のひとり相撲にあぐねながら、倫は白川から離れようとはゆめにも思

わなかつた。白川の地位や財産、悦子や國に預けてある長男の道雅の將來、それらが倫の絆になつてゐることはたしかだつたが、その外にも倫はどんな犠牲によつてでも、自分というものの内心の慾望や情緒を底の底まで良人に解つて貰い度いのだつた。それは倫としてはどうしても白川以外に解くことの出来ない情願なのである。

自分と良人との間にもう一人、小娘の須賀が割込んで來ることを想像すると、倫は今までもどうしても自分の聲がほんとうに聞えてくれなかつた良人が一層、遠いところへ歩みさつてゆくように思われるのだつた。

倫は良人に須賀の寫眞を送つて、その承知の返事を受取つた晩、良人を殺すゆめをみて、わが聲に驚いて眼ざめた。

良人を締めた手の力がさめた後まだ握りしめた拳にまぎまぎと残つていて、倫はわが身が恐ろしく床の上に起上つてしばらく胸を抱いていた。

行燈の細い燈心の光りに、隣りの床にぐつすり寝入つてゐる悦子のやわらかくふくらんだ片寢の頬が、ほんのり白く浮んでゐる。この子は起きている時は、割に大人びてゐるだけに、寢顔のあどけなさか倫には可愛くおもわれるのだつた。甘く育ててはならぬといつても心に張をもつてゐるので、悦子は母よりも女中や懇意な人になじんで、他から可愛がられる娘だつたが、こうした深夜に苦しい夢からさめた倫が油汗を總身に流しながら、焼けつく沙漠の中の唯一つの泉のように涙ぐんで眺め入つてゐる眼ざしを悦子は夢にも知らないのである。

須賀が母親と一緒に久須美の家へはじめて挨拶に來た時、悦子は母やきんから一緒に福島へつれてゆく人だと言われて、須賀の美しさに子供心を喜ばされたらしかつた。

「綺麗ねえ。この間の寫眞の人ね。あの人おうちで何するの？」

と悦子がきくと、母はちよつと眼を避けるようにして、

「お父さまの御用をするのよ」